令和８年度第１回厚木市里地里山保全等促進委員会　会議録

〔会議主管課〕環境農政部環境政策課
〔日　　時〕令和８年８月 20 日（木）10 時から正午まで
〔場　　所〕厚木市役所第２庁舎 15 階　農業委員会会議室
〔出　席　者〕厚木市里地里山保全等促進委員会委員　７人
事務局（環境農政部長、環境政策課長、環境政策係長、
環境政策係主査、環境政策係主任）５人

１　開会　環境政策課長

２　案件
（1）里地里山保全等促進条例の運用状況について（資料１）

【質疑・意見】
（Ａ委員）
七沢里山づくりの会は、登録者 79 人という大きな団体であったと思うが、活動を終了した後の土地の現状や今後の見通しはどうなっているのか。

（事務局）
土地の現状は、活動終了に伴い人の手が入らなくなったため、草木が生い茂り、荒れた状態に戻りつつある。解散の主な要因は、主要メンバーの高齢化に伴うマンパワーの低下であるため、今後の見通しは立っていない。

（Ｂ委員）
資料に記載されている「登録者数」は、実際の「活動参加人数」のことか。

（事務局）
資料の人数は「累積の登録者数」であるため、活動に参加した人数とは異なる。
実際の年間活動状況は、「七沢里山づくりの会」では、年間 13 日の活動日に対し、市民ボランティア含む参加人数は、延べ 228 人である。「荻野三ツ沢の里山を守る会」では、田植えから稲刈りまでの時期を中心に年間５～６回活動しており、昨年度は延べ約 80 人前後の参加があった。

（Ｃ委員）
七沢マルチライブプラン登録者 79 人のうち、他の団体へ移行したり、受け皿となるような活動へ参加されたりしている人はいるのか。

（事務局）
頻繁に参加されていたメンバーの多くは、既に荻野マルチライブプランにも重複

して登録している。七沢里山づくりの会解散時に他団体への案内・アナウンスを行ったが、解散を機に他団体へ本格移行した人数は現時点では少ない状況である。

（Ｄ委員）
NPO 法人でなくなった団体があるが、どういった経緯があるのか？

（事務局）
NPO 法人として活動するためには、定期的に法務局へ事業報告をしなければならず、会員の負担となっていたことから、令和７年度末に NPO 法人を解散、任意団体へ移行という判断となった。

（Ｄ委員）
資料 18 ページにおいて「グリーン成長桜」の解散に関する記載があるが、既に解散しているのか。

（事務局）
解散予定時期は、令和 10 年３月末を見込んでいる。

(2) 第３次厚木市里地里山保全等促進計画策定について
（資料２－１、２－２、２－３）

【質疑・意見】
（Ｂ委員）
資料 28 ページの認定団体の活動面積と資料 23 ページの総面積が異なっているが集計時期の違いによるものか。また、認定団体数が資料 31 ページでは８、資料 28 ページでは９となっているがこの違いは。

（事務局）
資料 23 ページ目の面積は誤りで、正しくは約 6.8ha である。飯山農楽校の協定地の中に市のみで認定している場所があり、その分が漏れていた。
活動団体数は、令和７年度末では 10 団体だが、令和８年度では９団体である。令和７年度に新規認定を受けた団体は２つあったため、資料 31 ページでは継続的に活動している団体として８団体と記載している。整合を図るよう修正する。

（Ａ委員）
資料 42 ページの基本理念について、次世代に継承するということに意味があると思うため。案２が良いと思う。案１は里地里山の自然が厚木市民だけのものと捉えられるように感じた。また、理念の中に目標や思いを柔らかい表現で盛り込めるとより良いのではと思う。

（Ｅ委員）
　案１について、多様な主体という表現はピンとこない。また、案２については、内容は良いと思うがイメージが湧かない。もう少しイメージしやすい表現だと良い。

（Ｃ委員）
　例えば中学生が読んでも理解しやすいやすいような表現で、市が描く目標とそれを受けどうしたいのかといった内容を盛り込めると良いのではないか。

（事務局）
　頂いた意見を基に、会議録送付時や次回の会議で改めて提案させていただきたい。今後、お気付きの点があれば御意見を頂きたい。

（事務局）
　資料 46 ページの目標の設定として、生物多様性に対する指標が必要だと考えている。ゲンジボタルの確認地点数を案として設けたが、これは市民団体などの活動で把握されているものなのか、それとも調査をお願いすれば把握できるものなのか。

（Ｆ委員）
　市で実施している、アプリを活用した市民参加型の生き物調査で把握できるのではないか。

（Ｅ委員）
　恐らく自分しか知らない生息地を知っているのだが、今年も生息数が増えているように思う。アプリを活用した調査なら協力しやすい。

（Ｃ委員）
　指標について、計画達成のためにどういった目標があるのか、10 年後に目標を達成するためにどのような指標とするのかを考慮して設定すべき。また、目標の達成には地元の方の協力が必要不可欠である。そのため、分かりやすく目に見える指標を設定することは大切だと思う。

（Ｄ委員）
　荻野三つ沢の里山を守る会にボランティアとして参加しているが、このままだと高齢化で活動が厳しくなるということで関心のある方に入っていただいたが、農業をやったことのない人も多い。また、40・50 代の世代の方は忙しく、なかなか時間が取れないのが現状である。
　地権者との関わりも薄く、もっと地元の農家の方等からの支援や後押しを得て、ノウハウを継承していくことが課題だと感じる。

（Ｆ委員）
　参加するにしても、行けるときにやるという内容でないと難しい。稲作体験をして米を作ることも良いと思うが、花を育てて観光地化するなど活動で収入が出ることでもアピールになると思う。収入が出ることで企業との連携にも繋がっていくのでは。

（事務局）
　団体によって求めているものに違いはあると思うが、収入が出るということは、里山活動の付加価値の部分になる。また、収穫量が上がったり、品質が上がったりすることによって、活動をされている方たちの満足度も上がるように思う。自分たちで目標を持つと活動が盛り上がっていくと思うので、そうした魅力を伝えていきたい。

（Ａ委員）
　各活動団体が抱えている問題がある中で、参加してもらうためのアプローチを考える必要があるように思う。そのためには、市の思いや行政としてなぜ里山を保全し、何を目指しているのかを示すことも大切だと思う。

（Ｄ委員）
　まずは自然を体験してもらうことが大切。生産することだけでなく、例えば子どもたちに泥んこ遊びを体験してもらうなど、自然の中で楽しむ体験をしてほしい。

（事務局）
　市では、里山の持つ様々な機能を次世代に繋ぐために保全する必要があると考えている。里山の機能は、景観の形成や文化の継承、自然と人間の生活圏との緩衝地帯などがある。
　社会構造の変化の中で、経済活動と里山が切り離された現在において、人工的に手を加えて維持しているのが現状である。生活がありながら保全活動を続けるということは大変なことであり、それが人材不足に繋がっていると認識している。
　里山保全が抱える問題に対し、何に魅力を感じてもらい、どのように大変さを乗り越えるのかが大きな課題である。
　現在は、大学生の持つ意欲や知恵、力を借りて問題に取り組んでいきたいと考えており、来年度には、大学生が主体となって企画・立案、里地里山の活動に取り組んでいく事業を検討している。大学であれば新入生が入り、人材が循環するメリットも想定される。既存の団体との交流を通じて、人材を提供する代わりにノウハウを得るといった効果も考えられる。

（Ｇ委員）
　農大では保育園と連携し、近年サツマイモ収穫体験を行っている。子どもたちに教えることで学生達の次の活動へのモチベーションや喜びに繋がっているため、ま

ずは成功事例を作ることが必要だと思う。

そのためには、市がどうしたいのかを示し、専門家による計画に基づいた活動であれば参加者が集まるのではないか。しかしながら、野菜であれば雑草や害虫対策といった管理が非常に大変でもあり、学生が仕切って運営していくとなると難しいと感じる。市がバックアップし方針を示さないと、学生はなかなか動けないと思う。説明会を開催するのであれば、案内状やポスター等で告知することは可能である。

（C委員）

計画の段階から学生を参加させ、活動の中で自分の意見が言える場があることは学生にとって良いと思う。そうすることで学生達の実行に結びつき、最終的な達成感にも結びつくのではと思う。

3　その他

次回の会議は 10 月頃を予定している。

議題２で検討いただいた基本理念や指標については、会議録送付時又は次回の会議でお示しするので、御意見等あればメール等で御連絡いただきたい。

4　閉会